
公開シンポジウム

文化財を伝える－東日本大震災で被災した文化財を考える
要旨集

開催日時:2015年12月19日(土) 13時～16時25分(開場12時)

会 場:東北歴史博物館

主 催:一般社団法人 文化財保存修復学会

共 催:東北歴史博物館

後 援:文化庁、日本文化財科学会、東北大学災害科学国際研究所、
宮城県被災文化財等保全連絡会議、特定非営利活動法人 宮城歴史資料保全ネットワーク、
一般社団法人 国宝修理装演師連盟、読売新聞社

開催主旨

2011年に未曾有の被害をおこした東日本大震災は、地域に根ざした文化財にも大きな被害をもたらしました。文化財保存修復学会は、被災地支援の観点から、研究対象とする文化財に着目し、東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会の構成団体のひとつとして、文化財レスキュー事業に参加し、多くの学会員が被災地に赴いて文化財の救出・一時保管・応急措置の作業に携わってきました。また、劣化損傷が著しく、本格的な保存修復処置が必要な文化財については、その文化財の保存修復を専門とする会員を派遣し、修復設計を実施するなどの支援もあわせて展開しています。これら一連の支援活動は、文化財保存修復学会が阪神・淡路大震災以降、災害対策調査部会を設置し、被災した文化財の支援活動を20年にわたって実践してきた経験に裏打ちされたものです。

そこで、本シンポジウムでは、東日本大震災で文化財レスキューされた被災文化財の「その後」に注目します。ここでは、文化財レスキューされた多くの文化財が地域復興にどのように関わりをもっているのか、あるいは地域再生のためにどのように活用されるべきなのかについて参加者の方々とともに考える機会となることを期待します。

プログラム

12:00 開場

13:00 開会

総合司会：中村晋也(金沢学院大学)

13:05－13:10

開会挨拶 三浦定俊(文化財保存修復学会理事長)

13:10－13:15

対談講師紹介

13:15－14:15

対談「未来へ伝える文化財防災」

平川新(宮城学院女子大学学長) × 森田稔(九州国立博物館名誉館員)

14:15－14:30 休憩

14:30－14:50

講演「地域歴史資料と災害対策～宮城歴史資料保全ネットワークの取り組みから考える～」

天野真志(東北大学)

14:50－15:10

講演「被災文化財を伝える～宮城県の現状と東北歴史博物館の取り組み～」

小谷竜介(東北歴史博物館)

15:10－15:30

講演「文化財防災ネットワークの構築を目指す」

和田浩(東京国立博物館)

15:30－15:40 休憩

15:40－16:20

パネルディスカッション「東日本大震災で被災した文化財を考える」

コーディネーター：日高真吾(国立民族学博物館)

パネラー：天野真志(東北大学) × 小谷竜介(東北歴史博物館) × 和田浩(東京国立博物館)

16:20－16:25

閉会挨拶 本田光子(文化財保存修復学会副理事長)

地域歴史資料と災害対策～宮城歴史資料保全ネットワークの取り組みから考える～

天野真志(東北大学)

東日本大震災によって多くの被災資料が発生するなか、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク(以下、宮城資料ネット)は、主に個人所蔵の歴史資料を対象とした救済活動を展開した。その活動過程でさまざまな専門家との交流関係が生まれ、さらには市民共同による被災資料対応が進められるようになった。

震災から 5 年近く経過した現在の活動は、被災資料の安定化に向けた対応とともに、資料の返却・保存・活用に向けた取り組みが中心となっている。前者は、震災直後より継続される市民ボランティアが大きな役割を担っているが、同時に今後の災害対応に向けた人材養成も課題となっている。また、後者については所蔵者や自治体との協力関係が重要となっているが、時間の経過とともにさまざまな課題が浮上し、中長期的視野に基づく対応が求められている。

本報告では、宮城資料ネットを中心に実施してきた震災対応の経過を紹介するとともに、そこから派生したさまざまな取り組みについて報告する。



広瀬市民センターとの共同による
市民向けワークショップの様子



大学生を対象とした作業の様子

被災文化財を伝える～宮城県の現状と東北歴史博物館の取り組み～

小谷竜介(東北歴史博物館)

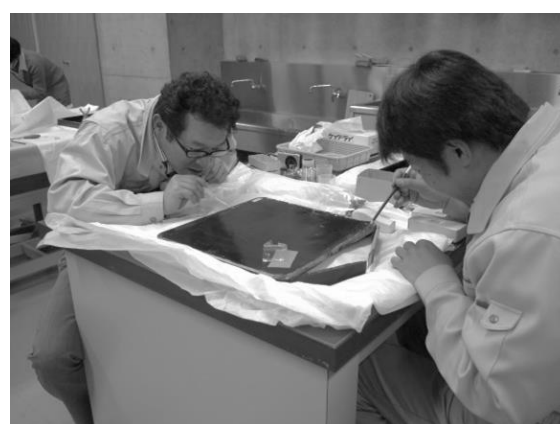
東北歴史博物館は、宮城県立の人文系博物館として東日本大震災後の文化財レスキュー活動で一定の役割を果たした。一つには、旧東北歴史資料館の建物を浮島収蔵庫として管理しており、被災資料の受入に一定の余力があったこと、もう一つには学芸職員が21人おり、人的にもなんとかスタッフを送り込める余力があったことが上げられる。そのため、文化財レスキュー事業の本格的な作業が終了した2011年7月以降、新たな案件や、被災資料の安定化に県内で対処するに当たり、中心的な役割を果たすことになった。

現在、宮城県内における被災資料の取り扱い、博物館、文化財保護行政に関わる機関によって組織された宮城県被災文化財等保全連絡会議が担っている。ここでは、被災資料の現状や今後、どのように所有者に戻していくのか、という点について話し合われ、協働して対応している。東北歴史博物館はここでも、事務局として全体の運営に関わり、県内の状況把握を継続している。

東日本大震災の発災から5年を経ようとしている現在、資料の安定化、収蔵環境の安定化に一定の成果を挙げつつある。また、こうしたことを自分たちで行っていくために県有会等も開催している。一方で、それをどのように活用していくのか。例えば、被災した状態のままに保存していくのか、完全に修復するのか、といった今後を見据えた課題も徐々に明らかになってきている。本報告では、これまでの取り組みを紹介するとともに、現在の課題について、主として東北歴史博物館の取り組みを通して紹介する。



第1回宮城県被災文化財等保全
連絡会議の様子



漆製品応急処置ワークショップの様子

文化財防災ネットワークの構築を目指す

和田浩(東京国立博物館)

大規模災害が発生すると文化財の被害が広域に及ぶため、大規模な救援体制による支援が必要となる。大規模な救援体制とは、官公庁、全国の博物館・美術館、関連学会、NPO 法人等複数の団体・組織が連携して取り組む全国規模の体制である。ここでの連携とは、情報の収集と共有、人材の派遣、物資の調達など文化財の救援に関するあらゆるサポートをするための相互協力を意味している。こうした災害時に速やかな連携を構築して対応するためには、平常時からの備えが必須である。平常時には、減災に向けた取り組みを強化し、災害時の連携構築を速やかに行い、効果的・効率的に救援を実行するためのネットワークの維持を行うことが非常に重要となる。このような背景のもと、2014年7月、独立行政法人国立文化財機構(東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館、東京文化財研究所、奈良文化財研究所、アジア太平洋無形文化遺産研究センター)は「文化財防災ネットワーク推進本部」を設立し、文化庁と連携して災害時の文化財等の防災に関するネットワークの構築を行うこととなった。

また、東北地方太平洋沖地震文化財等救援委員会に参画した団体・機関を中心に、文化財と防災に関する関係団体等に声をかけ、「文化遺産防災ネットワーク推進会議」を設立し、改めてネットワーク構築の必要性と今後の取り組みについて共通理解を得るための取り組みを始めた。この会議は、独立行政法人国立文化財機構、独立行政法人国立美術館、独立行政法人国立科学博物館、大学共同利用機関法人人間文化研究機構、国立国会図書館、公益財団法人日本博物館協会、公益社団法人日本図書館協会、全国科学博物館協議会、一般社団法人文化財保存修復学会、日本文化財科学会、全国美術館会議、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、全国大学博物館学講座協議会、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク、歴史資料ネットワーク、西日本自然史系博物館ネットワーク、全国歴史民俗系博物館協議会、大学博物館等協議会、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団、が参画するもので文字通り全国規模(2015年3月現在19団体)によるネットワークで文化財防災への取り組みが本格的に始まっている。



防災ネットワーク推進室研究員研修事業
(陸前高田市立博物館、2015年8月18日)

講演者プロフィール

平川新(ひらかわ あらた)

宮城学院女子大学学長、
東北大学名誉教授。

東北大学文学研究科博士課程中退(1981)。
博士(文学)。東北大学文学部助手、同東北ア
ジア研究センター長、同災害科学国際研究所
長などを経て現職。主な著書・編著に、『通説
を見直す－16～19世紀の日本』(2015)、『江
戸時代の政治と地域社会』全2巻(2015)、『講
座東北の歴史』第2巻(共編、2014)、『東日本
大震災を分析する』全2巻(共編、2013年)、
『歴史遺産を未来へ』(共編、2011)、『開国へ
の道』(2008)、『近世日本の交通と地域経済』
(1997)、『紛争と世論』(1996)などがある。

森田稔(もりたみのる)

九州国立博物館名誉館員、

一般財団法人環境文化創造研究所理事。

名古屋大学大学院文学研究科博士(前期)課
程修了(1980)。神戸市立博物館学芸員、文化
庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官、
京都国立博物館学芸課長、九州国立博物館
学芸部長、副館長を経て2014年より九州国
立博物館名誉館員、一般財団法人環境文化
創造研究所理事を務める。著書に『アジア陶
芸史』(共著、昭和堂、2001)、共編著に『考古
資料大観6 弥生・古墳 青銅・ガラス製品』
(小学館、2003)、『私たちの文化財を救え!!』
(クバプロ、2007)がある。

天野真志(あまの まさし)

東北大学災害科学国際研究所助教。

東北大学大学院文学研究科博士後期課程単
位取得退学(2010年)。博士(文学、東北大学

2011)。東北大学東北アジア研究センター教
育研究支援者を経て、現在に至る。主な論文
に「歴史資料の津波被害と保全対策」(『古文
書研究』75、2013)、「津波被災歴史資料とボ
ランティア」(奥村弘編『歴史文化を大災害から
守る 地域歴史資料学の構築』東京大学出版
会、2014)などがある。

小谷竜介(こだに りゅうすけ)

東北歴史博物館学芸員。

埼玉大学大学院文化科学研究科修了(1997)。
修士(文化科学)。宮城県教育庁文化財保護
課勤務を経て、現在に至る。主な著書に『鮭～
秋味を末人々』(2003)がある。

和田浩(わだ ひろし)

東京国立博物館学芸研究部保存修復課環境
保存室長。

京都大学大学院人間・環境学研究科修士課
程修了後、南開大学(中国・天津市)へ留学。
2000年より東京国立博物館に所属。博物館
の収蔵環境、展示環境、輸送環境に関する計
測、解析、改善計画立案と現場管理を主な業
務として活動が続けている。

日高真吾(ひだか しんご)

国立民族学博物館文化資源研究センター准
教授。

東海大学文学部史学科日本史学専攻卒業
(1994)。博士(文学)(東海大学、2006)。元興寺
文化財研究所研究員を経て、2000年より国
立民族学博物館助手。主な著書に『災害と文
化財』(千里文化財団、2015)、『女乗物 その
発生経緯と装飾性』(東海大学出版会
2008)、編著書に『記憶をつなぐ－津波被害と
文化遺産』(千里文化財団、2012)、『博物館へ
の挑戦－何がどこまでできたのか－』園田直子
と共編(三好企画、2008)がある。

文化財保存修復学会 公開シンポジウム

文化財を伝える－東日本大震災で被災した文化財を考える

実行委員会委員長 / 三浦定俊(文化財保存修復学会理事長)

副委員長 / 本田光子(文化財保存修復学会副理事長)

委員 / 荒井経(東京藝術大学)、内田俊秀(京都造形芸術大学)、岡泰央(国宝修理装演師連盟)、
加藤和歳(九州歴史資料館)、小谷竜介(東北歴史博物館)、
佐野千絵(東京文化財研究所)、田井東浩平(土佐山内家宝物資料館)、
中村晋也(金沢学院大学)、日高真吾(国立民族学博物館)、間渕創(三重県総合博物館)、
米村祥央(東北芸術工科大学)、和田浩(東京国立博物館)

要旨集編集 / 和田浩